

イエスの死についての一考察

二〇一六年十二月十四日

バイブル・サービス

山 田 恵

もうすぐクリスマスですね。日本では十一月に入ると一気に町中にクリスマスマムードにあふれ出し、とてもワクワクした気持ちになります。お祭りのな感覚で楽しんでるだけの人が多いと思いますが、本来クリスマスは救い主であるイエスの降誕を祝う日です。クリスマスケーキもツリーも、サンタクロースも大好きだけれど、イエスが生まれたことがどうしてそんなにおめでたいのか、また、どうして磔にあう必要があったのかについて、納得がいかないというのが大方の日本人の心理ではないでしょうか。私も実際そうでした。今日は、そんな疑問について私が考えたこと、そしてクリスマスに際して、決意していることをお話ししたいと思います。

イエスの降誕がどうしてそんなにおめでたいことだったのかと言えば、それは、旧約聖書の「ミカ書」五章一節にあるメシアの誕生だと考えられたからです。新約聖書にはイエスが生まれた日を特定する記述はないようですが、次のようにその特別な日が記されています。

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みにきたのです。」

〔「マタイによる福音書」二章一節〜二節〕

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼う葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」

天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてください。その出来事を見ようではないか」と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼う葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。

〔「ルカによる福音書」二章八節〜一六節〕

これらの記述から「ユダヤ人の王」として「救い主」あるいは「主メシア」として生まれたイエスの誕生がいかに待ち望まれたものであったのか、いかに祝福に満ちたものであったのかがわかります。

イエスは神の愛する幼子でした。その愛する幼子を磔にすることを目的に神が地上に降ろしたのでしょうか。その誕生が喜びに満ちたものであった分だけ、イエスの痛ましい磔という死の瞬間は私たちの意識から消えることはありません。どうして祝福に満ちて降誕されたはずのイエスが、磔という無残な死を迎える必要があったのでしょうか。今引用したイエスの降誕の記述には、後に磔にあうことになっているといった計画は一切語られていません。しかし、ある時から、イエスは「死と復活」を予告し始めます。

このときから、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。

〔「マタイによる福音書」一六章二二節〕

そして、弟子たちには、次のように警告しています。

一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない」と弟子たちに命じられた。彼らはイエスに、「なぜ、律法学者は、まずエリヤが来るはずだと言っているのでしょうか」と尋ねた。イエスはお答えになった。「確かにエリヤが来て、すべてを元どおりにする。言っておくが、エリヤは既に来たのだ。人々は彼を認めず、好きなようにあしらったのである。人の子も、そのように人々から苦しめられることになる。」

〔「マタイによる福音書」一七章九節〜一二節〕

こういった記述から推察するに、イエスが磔になってしまふことは降誕時の計画では想定されていなかったものの途中からは避けられないものになってしまったということです。実際、メシアを予言する「ミカ書」の記述では「彼は立って、群れを養う。主の力、神である主の御名の威厳をもって。彼らは安らかに住まう。今や、彼は大いなる者となり、その力が地の果てに及ぶからだ。」と述べられており、本来は本当の意味で世界の王になるはずだったことがわかります。ところがなぜか途中から筋骨きが変わってしまったことになりました。

どうして筋骨きが変わってしまったのでしょうか。聖書を読むと、イエスが磔に処せられることになった原因は弟子の一人だったユダの裏切りと、その後の裁判で、民衆が、イエスにとって不利な偽証をしたことによるものだということがわかります。わかりやすく言えば、イエスはすでに当時の権力を握っていた体制側の権威を脅かすような教えを広めていたと思われたために、その影響力を抑えるため、当時の権力者たちの反発と憎悪、そしてその権力者に取り入ろうとした弟子の裏切りによって殺されたということです。

それでもイエスを何とか救おうとした人もいました。例えばイエスに尋問したピラトです。「ヨハネによる福音書」ではピラトはイエスに尋問する場面が語られています。

そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、「お前がユダヤ人の王なのか」と言った。イエスはお答えになった。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか。」ピラトは言い返した。「わたしはユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をしたのか。」イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、

部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。」そこでピラトが、「それは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来了。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」ピラトは言った。「真理とは何か。」

〔ヨハネによる福音書〕一八章三三節〜三八節〕

ピラトは、イエスに何の罪も見いだせないとユダヤ人たちに伝え、過越祭の釈放の対象にしようと試みますが、そこにいたユダヤ人たちは、それを拒み、イエスではなくバラバという強盗を釈放する方を選びます。

ピラトは、こう言うてからもう一度、ユダヤ人たちの前に出て来て言った。「わたしはあの男に何の罪も見いだせない。ところで過越祭にはだれか一人をあなたたちに釈放するのが慣例になっている。あのユダヤ人の王を釈放してほしいか。」すると、彼らは、「その男ではない。バラバを」と大声で言い返した。バラバは強盗であった。

〔ヨハネによる福音書〕一八章三八節〜四〇節〕

これによって、イエスの磔は確定されてしまったというのが聖書に書かれているいきさつです。

ここで再び疑問が生じます。イエスは明らかに弟子の裏切りを事前に知っており、自分が殺されるだろうということも知らされていました。イエスはいくらかでも逃げることはできました。しかし、逃げることはありませんでし

た。また父である神も、筋書きを変えることはできただけです。しかし、磔を阻止するのではなく、愛しい子どもが磔になることを許しました。私の疑問は、どうして父である神が愛しい子であるイエスの磔を許し、イエスもそれを受け入れたのかという点です。皆さんはこういったことについて考えたことがありますか。

救世主として世に生まれたイエスは、神様の計画では、「ミカ書」の預言のとおり、「大いなる者となり、その力が地の果てに及ぶ」ようになるはずでした。しかし、当時の権力者だけでなく民衆の多くが、イエスの言葉を信じず、自分の権力や私利私欲を手放すことを拒みました。大衆もまた、真理とは何か考えることもせず、体制側に従っただけでした。イエスが生まれた時代の人たちが神の思いに反し、イエスを受け入れることを拒んでしまったため、当初の神の計画は変更せざるをえなかったというのがこの顛末だったと思います。

聖書にもはっきりと書いてあるように、私たちは「自ら蒔いたもの」を刈り取ります。自ら蒔いたものとは何でしょうか。それは自ら決断したことです。つまり、私たちはこの世で何を大切にするかを自ら選び、そして自らの選択には責任をとる必要があるということです。神が与えてくれたもので最も貴重な贈り物の一つが自由意志です。神は私たちが神を信じるように強制することはありません。そうすることはたやすいことのはずですが敢えてそうしないのです。それは親が子を見守る時のように、私たちが自由にさせて見守りつつ、私たち自身がその決意をするように待っておられるからです。そして、そのようにして自由意志で決断することが神の国へと入るための条件だからです。無理やり人をコントロールしようとするのは、地上でもそうであるように、悪意のある存在たちだけです。その点に私たちは気付く必要があります。私たちは自分の責任で自由にどの道を行くかを選び、そして決断したことに絶対の責任を負っています。

結果的に言えることは、当時の権力者や民衆の大半は、明らかに自由意志の下での選択を誤ったということです。

彼らは、神の国ではなく、この世の宝を選びました。その結果が、せっかく誕生したメシアを磔にするという帰結に至りました。神はその選択を尊重し、イエスもそれに従いました。ひとときのものにすぎない地上の命を失うことは神の国では永遠の命を持つ神の子であるイエスにとっては大きなことではなかったはずですが、神の計画が成し遂げられなかったこと、人々が神の計画を受け入れることを拒否したことに對する大きな悲しみがあつたはずです。しかし、それが当時の人たちが選んだことだったため、神はイエスの磔を認め、イエスもそれに従つたというのが事の顛末だつたと考えます。それによって、私たちに、いかに生きるべきかを教えるためです。イエスは眞実を証しするためにきたと言っています。自由意志による選択の重要さとその責任の重さを教えるためです。また、イエスは、自らの死によって、私たちに、人間が生きるべき最善の道を示すという役目もあつたはずです。それは自らの命を捧げてまで他の人の命を救うという愛の道です。イエスは、磔になることを受け入れただけでなく、自らの流す血によって人の罪を贖ってくださるように父である神にお願いしました。また、同時に磔になつた罪人の魂をも救いました。自分を磔にすることを決断した人たちまでも含む人の子の罪の贖いのために自らの命を捧げる愛ほど深い愛があるでしょうか。私たちはその愛の深さに感謝しつつ、その愛に応えるよう、イエスが生きたように眞実を生きる努力をしていく必要があると考えます。

それにしても、イエスの誕生が喜ばしいものであつた分、人の子がメシアを磔という刑にあわせてしまつたことには今でも心が痛みます。それと同時に、自分自身が今、毎日の生活を送りながら、同じように神の計画を狂わせてしまうような間違つた決断をしていないかについて考えさせられます。

クリスマスに際し、私たちに眞実を証するために降誕されたイエスに心から感謝すると共に、地上の宝に目が行きがちな自分自身を反省し、眞理を見極める目を養うこと、そして、その眞理を貫く勇氣を持ち、実行していくこ

とを日々決意していくことがイエスが示していたことだと、心を心にとどめたいと思います。神の計画がこの世で成し遂げられるには、人の子の正しい決断が必要だということを聖書は物語っています。真理とは何か、他人の意見に左右されることなく自分自身でしっかりと考え、そしてその真理を生きるように、努めていく決意を新たにしたいと思います。

さて、これはあくまで私が聖書を読みながら個人的に考えたことです。皆さんもクリスマスに際し、イエスの降誕と地上の死の意味について考えてみていただければと思います。

(グローバル・スタディーズ学科准教授)